

京都大学を定年退職して

昭和 51 年 3 月学部卒業

重川 一郎

私は、本年 2019 年の 3 月に京都大学を定年退職いたしました。この機会に昔を振り返って、思い出を綴ってみたいと思います。

私が京都大学に入学したのは、1972 年でした。入学式は途中でヘルメットを被った学生が壇上で総長を取り囲み、騒然とした中で入学式が中止になるなど、学生運動がまだ尾を引いている状態で、大学構内は騒がしさに満ちていました。私の郷里は愛媛で、その愛媛の片田舎から出てきた学生の目には、大学というところが無法地帯にも見え、また青春のたぎりの様にも、混沌の渦にも見えたものです。田舎者にはあまりに刺激が強すぎた感がありました。その学生運動も次第に下火になり、今では平穩そのものという感覚で、隔世の感があります。当時を思い返すと、騒がしくはあるが熱気みたいなものがあって、それなりに面白さのある時代だったと思えます。

入学した当時は物理をやるのか、数学をやるのかと迷いがあったのですが、早々に数学に決めました。物理をやるにしても数学は必要で、その数学をやるのに精いっぱい物理までやる余裕がなかった、というのが正直な気持ちです。今でも物理は難しく感じます。どうもいろんなところに飛躍がある感じで、そここのところがなかなか乗り越えられない。それに比べると数学は、基礎から積み上げていけば曖昧さなしに理解できる感覚でした。結局のところそういう数学が性に合っていたようです。それにしても講義の進度は早く、みんなの後から半周か周回遅れのような感じで何とかついて行っているという程度でしたが。

3 回生進学の際に系登録というのがあり、私のときは大学紛争のお陰で系は自由に選べました。系に定員というものもなく、当然のこととして選抜というものもありません。何の制約もない自由放任の理学部そのものでした。3 回生の頃は関数解析がすっかりとききれいな理論に思え、それが使える研究分野として最終的に確率論を選びました。確率論は、関数解析がそのまま自然につながると言うものでもないですが、関数解析そのものを研究するより、それを使って何かをやれないか、というような気持ちでした。確率論も、中に入るといろいろバラエティーがあって、かなりの部分関数解析を使う分野もあり、結局そういうことを専門にすることになっていました。振り返ってみると自然な流れだったような気がしますが、当時はそういう先のことが見えていたわけではありませんでした。

4 回生の講究は、宮本宗美先生のところで岩波から出ていた飛田武幸著「ブラウン運動」

を読みました。強マルコフ性と言うのがさっぱりわからず手こずりました。今でも学生たちは苦しんでいるようですが、まあとにかく定義の通りだよ、という以外、今の私もうまく説明できません。とにかく4回生のときの講究でブラウン運動というのを知り、結局それを飯のタネに今まで生きてきたことになります。本当に、ブラウン運動様様です。

大学院も当然のこととして数学専攻を選び、渡辺信三先生の下で確率論の勉強を続けました。大学院に入学した1976年に、伊藤清先生が確率微分方程式の国際研究集会を開催しました。伊藤先生は外国での滞在が長かったのですが、数理解析研究所の教授として日本に戻ってこられていました。この研究集会はなかなか盛況だったのですが、ここで私はマリアヴァン解析というものに出会いました。正確には、その報告集の中で出会ったというべきでしょうが。これはフランスのマリアヴァン教授が創始した確率解析の新しい手法で、私の修論もこのマリアヴァン解析に関するものでした。そのころから急速にマリアヴァン解析は発展していきました。そういう理論の黎明期に自分の研究生活を始めることが出来たことは本当に幸運だったと思えます。むしろそういう幸運に乗っかる形で、何とか研究者の道が続けることが出来たということでしょう。



89. 7. 5 各ロシンポジウム確率解析

前列中央が伊藤清先生とマリアヴァン教授。伊藤先生の後ろが渡辺信三先生。重川は前列左から2人目。

さて、研究のスタートを切ってから、1979年に大阪大学に助手（今でいえば助教）としての職を得ることが出来ました。そして1989年に京都大学に戻るまで、結局大阪大学に10年間在職しました。自由放任の京都大学理学部にいた感覚からすると、大阪大学の印象は、学生への指導がきめ細かく、学生の粒がそろっている、ということでした。それに比べると、京都の学生は、規格はてんでバラバラで、めちゃくちゃできるやつもいるし、ダメなやつもいるというありさまで、やたらと振幅が大きい。その規格外のところに、い

ろいろ面白いやつもいたということではあります。もちろん阪大の中にも面白い学生もいて一概には言えないですが、大まかな印象としてそうだったということです。

阪大に10年間いてのち、1989年に京大に助教授で戻ってきました。相変わらずマリアヴァン解析や、対数ソボレフ不等式などの研究をしていました。ディリクレ形式の理論も確率論の中では有効なので、それも主要な研究対象となりました。京都に戻ってから、1990年に国際数学会議が京都で開催されました。そのための準備で、渡辺信三先生のお手伝いをしました。それほど深くかかわったわけではないですが、こういう国際会議は外国の研究者に会えるのでそれが楽しみでもあります。1999年3月に渡辺信三先生が定年で退職された後、2000年1月に私が教授となりました。教授になってからは、とにかく忙しいという感覚でした。このときから退職まで、教室主任（今なら専攻長）や専攻主任、教務委員長などいくつかやりましたが、やはり教授になるとやたら忙しいというのが正直なところ。大学の先生は、昔に比べると忙しくなって、その分研究時間が制約され、望ましい状態ではないように思えます。それでも、合間合間に時間を見つけ、研究を続けることが出来たので、京大はまだ条件がいいのかもしれない。充実した図書など、研究環境としては申し分なく、その点は恵まれていました。数学教室の教員や、事務員の皆さんにもお世話になりました。心からお礼を申し上げます。

ところで、教務委員長という職務の経験からすると、制度の変化を痛感します。特に系登録に関して。我々の時代は系登録というのは、無条件で受け入れてもらえましたが、今は数理学系に定員があり、選抜試験があります。数学講究も必修科目になっています。そういうところは、我々旧世代の人間には、昔に比べて窮屈になった気がします。物事が変化していくのは世の常ですが。

もう一つ特記すべきことは京大数学同窓会の設立にかかわることができたことです。これは井川満さんを中心に進められ、渡辺信三先生を会長に迎えることで形も整い、2015年6月6日の設立総会にこぎつけることができました。私もその手伝いをすることができたことは、偶然のめぐり合わせとはいえ、幸運なことだと思います。

さて、私が京都大学に戻ってきた1989年は平成元年に当たります。そして30年間京都大学に在職し、2019年の3月に定年を迎えました。この年は平成の最後の年に当たります。しかもそのことが平成が終わる前に決まっていた。このことも珍しいことだと思います。従って私の京都大学での在職は、平成とぴったり重なり合っているわけです。この偶然の符合も何か感慨深いものがあります。私の京都大学の在職は、平成とともにあったのだなあと。そして平成とともに終わっていったのだなあと。今は令和と言われる時代になりました。新しい時代に向けて、皆さんのこれからの発展を祈ってやみません。